ズームアップ
ZOOM UP ―― 株式会社SHUHARI

保育施設および発達支援施設「元気キッズ」を運営し、保育・療育の2本柱で多様な子どもたちの元気を受け止める

保育施設と、発達に課題がある子どもの療育を行う発達支援施設を「元気キッズ」の名称で展開するSHUHARI（シュハリ）。子どもの発達の基本は家庭であるとして、子どもだけでなく保護者にも寄り添いサポートを行ってきた。同社は多様な子どもたちの個性あふれる元気を受け止めながら、「今より少しでも良いことはやってみる」の姿勢でさまざまな挑戦を続けている。

代表取締役　中村 敏也氏

●代 表 者　代表取締役 中村 敏也
●創　　業　平成16年9月
●設　　立　平成18年7月
●資 本 金　300万円
●従業員数　385名（2025年2月）
●事業内容　保育施設の運営、保育所のコンサルティング
●所 在 地　〒353-0004　埼玉県志木市本町5-8-5 中村ビル2階
TEL 048-485-8777　FAX 048-235-9275

●URL　https://genki-kids.net/
※SHUHARIが運営する「元気キッズ」のホームページ

「保護者の笑顔が子どもたちの笑顔につながる」「先生たちの笑顔が子どもたちの笑顔につながる」という考えのもと、保育・療育（発達支援）事業を営む株式会社SHUHARI。同社は「元気キッズ」のネーミングで志木、朝霞、新座の3市を中心に、幅広く事業を展開している。

保育事業は、認可保育施設や小規模保育施設を運営する「保育」、放課後児童クラブを運営する「学童保育」、一時的に病気の子どもを預かる「病児保育」、子どもの自宅で保育を行う「居宅訪問型保育」を展開。

発達支援事業は、得意な部分と苦手で困難を抱える部分の差が大きく、発達課題や発達特性等がある児童を母子分離で保育・療育する「保育型児童発達支援」「ペア指導型児童発達支援」、専門員が児童の通う施設に出向いて支援を行う「保育所等訪問支援」を展開する。さらに福祉サービスの利用に関する「相談支援事業」も行う。

「活動的に動き回る元気、窓の外を静かに眺めながら頭の中ではアクティブに飛び跳ねているかもしれない元気、自分のことを分かってもらえないと泣いている、このエネルギーも元気だと思うのです。そうした多様な元気を受け止める、これが私たちの保育・療育の姿勢です」（中村敏也社長）

現在、保育18施設、発達支援9施設、相談支援2施設を運営する同社。長年多様な子どもたちの発達を支援するサービスを展開しながら保育・療育の質を高め、保護者との信頼関係を築いてきた。運営する施設の数はその証しとも言える。

→ 保育園待機児童の課題の解消に向けて起業

創業は平成16（2004）年。大手通販会社に勤務していた中村社長が、従妹（いとこ）から「子どもを保育園に入れたくても預けるところがなくて困っている」という話を聞かされたことがきっかけとなり、待機児童解消のために保育事業を始めようと決意。働きながら保育学校に通って学び、会社を辞めて「保育園元気キッズ志木園」を開園した。

スタート時こそ利用者集めに苦戦したものの、イベント案内のPR、体験イベント後のきめ細やかなアプローチ等、地道な活動を続けることで、3カ月ほどで経営が

軌道に乗り始める。翌年には新座に2施設目を開園し、平成18年に株式会社SHUHARIを設立する。その後も新座栗原園、新座栄園、新座新堀園と順次新規施設を開設。同社の保育事業の評判が口コミで広がるのと併せて、当時すでに社会課題となっていた“待機児童問題”が新規施設の開園を後押しし、順調な成長を遂げていった。

「施設が増え、大勢の子どもたちと出会うことで、発達に課題のある子どもたちにも多く出会うようになりました。そこで、より多くの子どもの笑顔のために児童発達支援を3年勉強し、平成27年、保育型の療育支援を行う『児童発達支援元気キッズ新座教室』を開所したのです」

当時は母子で通所する療育施設しかなかった中で、同社は県内で他に先駆けて完全母子分離施設を開設した。そこには、子どもの発達の基本は家庭であり、子どもの発達課題と向き合う保護者に時間的・精神的にゆとりを持ってもらいたい――そうした思いがあった。施設の申し込みに訪れる保護者の中には、「うちの子は走り回るし順番を守れないし、突然かんしゃくを起こしてしまい、周囲から親の責任と言われてきました。だからこんな施設を待っていたんです」と涙を流して喜ぶ人もいたという。

中村社長は自社の存在を、子どもだけでなくそうした保護者も含めた家族を支える伴走者であると位置づけ、ペア指導型児童発達支援、保育所等訪問支援や相談支援事業、病児保育、学童保育など、保育と発達の困りごとを丸ごと支えるサービスを展開していく。こうして保育と療育の2本柱で事業を拡大していった。

保育事業の特徴

保育施設「元気キッズ」の特徴は、“叱らないで、伝えること”“子どもの自主性を伸ばすこと”だ。

例えば、いけないことをした時は、なぜいけないのかを根気よく伝えて自ら考える力をつけさせていく。また、保育士が決めたカリキュラムに沿って一斉に同じ活動をする「一斉保育」ではなく、ジャンルごとに用意された遊びのコーナーの中から自ら遊びを選択する「コーナー保育」の環境を整え、子どもの自主性を高める保育を提供している。

「そのほか、子どもが遊びから学びを深める『探求学習』も行っています。例えば、環境問題解決に向けてゴミをどうしようか？　というテーマで、子どもたちから『ゴミで家を作りたい』という意見が出たなら、『じゃあ、まずはゴミ拾いから始めようか』と、子どもが主体的に行動するよう私たちで促していくのです」

本社外観

病児保育室

(左)児童発達支援センター外観、(右)同センター園庭

子どもたちの行動を促す支援をすることで、自ら考える力がつくのだという。現在、同社の保育を参考にしたいと全国から大勢の関係者が視察に訪れている。

児童発達支援事業の特徴

発達支援施設「元気キッズ」は、発達課題や発達特性のある子どもを母子分離で預かる保育型の療育施設。子ども2人に対して1人の職員を配置して、しっかりと目の届く体制を敷いている。

子ども一人ひとりの“できること”“苦手なこと”のアセスメントを行い、育った背景や傾向等を把握して支援計画を作成。専門性を有する保育士、言語聴覚士、作業療法士、心理士等の専門員が連携して日常の生活動作をできるようにしたりコミュニケーションを促しながら、遊びや勉強に取り組む姿勢、集団でのマナーやルール等を教え、集団生活の中でも自分の力を発揮できるよう療育支援をしていく。

「保護者の悩みにも寄り添いサポートしています。家庭という愛着の土台がしっかりとでき、子どもにとって安心できる場となれば、それだけで発達の凸凹は落ち着いていきます。さらに専門員で適切な療育を行うことで、子どもが大きく成長するのです」

保育の様子

学童保育の様子

療育施設から保育園や幼稚園に通えるようになった子どもには、そこでの集団生活で自分の力を発揮できるよう専門員が園に出向いて直接子どもの支援を行っている。さらに施設の保育士等に関わり方のポイントを伝え、環境整備に配慮してもらうなど間接的な支援（保育所等訪問支援）も行い、どこまでも子どもたちに伴走しながらその成長を後押ししている。

良質な保育・療育を提供するための取り組み

同社には、職員全員で共有するルールや思い、行動指針をまとめた「Philosophy Book（フィロソフィー ブック）」があり、そこには「今より少しでも良いことはやってみる」という言葉が掲げられている。このポリシーをよりどころに職員はたゆまぬ努力を続け、同社の成長を支えてきた。

「職員同士が尊重し合って気遣う風土を作るための四つのルールのほかに、“良いことはやってみる”というみんなの頑張りを促すものを入れています。これは、常に考え続けて脳に汗をかくということ。この両輪が動き出したことで成長が加速しました」

Philosophy Bookに書かれた項目は職員のスキルチェックシートにも導入され、個人が掲げる課題と合わせて四半期ごとに評価が行われている。

また、保育・療育の質の向上に向けた取り組みでは、保育は定期的に外部講師を呼んで研修を行い、療育はほぼ毎月園内で研修を行うなどして知識や知見を深めスキルアップを図っている。

地域の悩みごと全般を解決していく

「多くの人が安心して子どもを産み、育てられる社会の実現に貢献していきたい」と語る中村社長。今後はさらなる施設の開設と合わせて、現在大きな社会課題となっている“不登校問題”解決に向けて、新たに取り組みを進めていく考えだ。

「今後は、不登校支援をはじめ地域の悩みごとをとことん解決していこうと思っています。現在私の妻がベーグル店を経営していて、そこを不登校の人や障がいのある人が働ける就労の場にしたいと思っています」

目指すのは、発達に課題があったり障がいがあったりにかかわらず、誰もが社会で主役になれる場所の創出だ。同社はこれから先も子ども・保護者・職員・地域住民の元気と笑顔を引き出しながら、“良いことはやってみる”の姿勢で事業を推し進めていく。その取り組みが、将来、社会全体を前進させていくに違いない。